〔研究論文〕

マレー・シンガポール攻略作戦をめぐる報道文
―― 昭和 17 年文学場一面

松本　和也

〔Article〕

Reportage about “The Murray-Singapore Invasion Operation”
: The Literary Field of Showa 17 (in 1942)

Katsuya　MATSUMOTO

Abstract

In this paper, the influence of “The Murray-Singapore invasion operation” in the literature field will be discussed from multiple perspectives.

First of all, I focused on reportage and articles by journalists and soldiers, not literary novels that were released after the fall of Singapore. They were highly praised in general although the evaluation was made from a perspective different from the artistic point of view. During such a period, “Discourse of Murray Strategy Chief Staff ”, which was written by the military man, was released and the writing became a big topic.

Secondly, just before the Asia-Pacific war started, the literary people sent to various parts of Asia focused on reportage and novels, which they wrote locally or after returning home. Regarding the reportage and novels, those written from the standpoint closer to that of journalists and soldiers than literary scholars’ were more appreciated. At the same time, a lively discussion in which it was unreasonable for literary people to write reportage unfolded.

Lastly, as the third, I examined what kind of tasks a literary person was subjected to in such a literary field of Showa 17 (in 1942). It was required for literary people to face a new motif and to take much time so as to make it a problem of theirs.

1. マレー・シンガポール攻略作戦と文学場

昭和 10 年代の文学場 [1] を考えるにあたって、アジア・太平洋戦争は最重要モメントの 1 つだが、その影響は当然、時期 - エリア - 局面によって異なる視界 - 問題構成をたちあげる。昭和 12 年 7 月 7 日の日中戦争開戦から 4 年後の昭和 16 年 12 月 8 日、戦局は新たな展開を迎える。この時、日本は終わらない中国との戦争にくわえ、米英とも開戦し、太平洋戦争へと突入していく。ここに、日本が東洋の盟主として西洋近代と戦うという図式が成立し、そのことを言祝ぐ言表が文学場でも大量に産出された [2]。ただし、その多くは真珠湾攻撃とそれに伴うラジオ放送に即したもので、逆にシンガポール攻略を目指した英領マレー・シンガポールへの進攻作戦については、翌昭和 17 年 2 月 15 日のシンガポール陥落まで、やや影が薄かったようにみえるし [3]、文学場でも《十二月八日

小説》(宮内寒彌)の多くは開戦の報と真珠湾攻撃をモチーフとしている[4]。

そこで、本稿ではマレー・シンガポール攻略作戦をめぐる報道文に注目する。《報告・報道文の目的は、新聞等によって情報を補いながら、読者の「日常生活」に「戦争」という出来事のリアリティを現前させること》にあり、《それによって戦地と銃後は「総力戦」を闘う一つの共同体として結ばれる》[5]のだが、あわせて、報道文という視座から昭和 17 年の文学場の歴史的な様相についても検討したい。というのも、開戦に先立つ昭和 16 年末、多くの文学者が白紙徴用[6]されて報道・宣伝の任にあたったことで、(日中戦争期に用いられたキーワード「報告文学(ルポルタージュ)」ではなく[7])報道文がジャーナリストや軍人のそれとの比較において問題化されていたのだから。しかもそれは、単に報道文にとどまる問題ではなく、文学場全体のシフト・チェンジにも関わっていった。

2. マレー軍作戦主任参謀談

昭和 16 年 12 月 8 日からマレー半島南下作戦をへて、昭和 17 年 2 月 15 日の山下・パーシバル会見によって英軍が降伏してシンガポールは陥落、その 3 日後にシンガポールは昭南市と改称される。こうした戦局の展開は新聞紙上でも報道されていったが[8]、シンガポール陥落の際、中村地平は「獅子の島は屈服せり(上)焔々たるジヨホールバルに映ゆ」(『読売新聞』S17.2.28)を次のように書き起こしていた。

> いまは誰でも知つてゐるであらうが、シンガポールは、マレー語でシンガプラ、獅子のすむ島といふ意味である。／勿論、現代化されたその島には、現在は獅子はすんではゐない。しかし、英帝国はその島に要塞を築き、世界に難攻不落を誇つてゐた。いはゞ百獣の王そのまゝに、倨傲なる姿をもつて東洋の一角に、無敵をとなへてゐたのである。／その獅子が遂にがつくりと前脚を折つてひれ伏すときがきた。二月十五日七時五十分、百獣の王は皇軍の前に無条件降伏を誓つたのである。(4 面)

ただし、新聞紙上では文学者による報道は相対的に少なく、大本営発表をはじめとした軍やジャーナリズムによる報道[9]の占めるウェイトが大きかった。もとより、南方へと徴用された以上、文学者もまた戦争 - 戦場をそのモチーフとすることが期待されていた。こうした局面にあって、青柳優は「当面と将来について」(『早稲田文学』S17.2)で、《軍報道部の感情を少しも混へない戦果発表の文章形式が、現実の生々しい截口を開けて見せるといふこともあつて、いまでは最も強靭な表現力を獲得してゐるといふことは興味深い》(117 頁)と述べ、軍報道部のそれを評価している。

ここで、太平洋戦争開戦後の報道文をめぐる状況について、海野十三「今次聖戦の報道文学を読む」(『読書人』S17.10)を手がかりに、整理 - 確認しておこう。まず海野は、《戦闘報道》を、《新聞記者の書いたものと、作家の書いたもの、及びその他――といふと画家や写真班や、時として軍人――の書いたもの》にわけられるとした上で、《但しその他は甚だ少く、中でも軍人が自ら筆を執つたものは今日極めて少い》(59 頁)と補足している。その上で、海野は《記者の書くものが戦闘につき細大洩らさず極めて詳細に且つ正確を期して記述してあるのに対し、作家の著すものはおほむね文学的な或ひは随筆的なものであるから、戦闘全体の記述に亘ることは少く、もちろん記者の著述の場合の如く詳細をつくしてゐない》と、《記者／作家》それぞれの記述を特徴づけていく。そこから導きだされるのは、次のような《記者／作家》の棲みわけである。

一つの戦闘に、記者と作家とが同時に居合はせて、報道文を書いた場合に、両者の著作態度も、又その作意、文体及び内容も大いに異つてゐる。だからして両者が競争状態に陥ることはない。しかも時間的にいつて、記者は報道文が迅速に内地の大本営に届く事を期するため、一刻を争つて書くが、作家の方は大体雑誌に発表するので、記者の場合の如く、新聞業務に直接関係がないので、時間を争ふ必要はなく、悠々と書く。〔略〕尚、作家の仕事として、後日に至つて戦闘の中から得た材料により戦争小説等の戦争文学の仕事をなすことが自らその責務となつてゐることが、記者の場合と全く異るのである。(59 頁)

さらに海野は、《読者の部面からいつても、記者が広く国民を相手にしてゐて、一般的であり、事務的であるのに対し、作家が書いた報道文の場合は、どつちかといふとその作家に特有な愛読者に対して強く呼びかけることが効果の重点となつて居る点が前者に対して異るもの》(60 頁)と、読み手の特徴にも論及し、上記報道文の特徴がそれぞれに応じたものであることを示していく。

こうした分割線は、単に報道文の種別・特徴を明らかにするばかりでなく、文学者(による報道文)の擁護、といった側面もはらんでいたようにみえる。というのも、無署名「文壇余録」(『新潮』S17.3)には、次のような報道文(の読み方)についての注意がみられるからである。

大東亜戦争の報道文や、前線の写真などを見て、はげしい感激を受けて涙を流すのは、おそらく日本人である限りは、万人が万人同じことであらう。しかし、この感動、この感激は、大東亜戦争といふ現実の迫力に揺すられるためであつて、単なる文章の技術的価値や、写真術のためではないのである。〔略〕その感動や感激の性質を、作品のそれと混同してはイケない。前者は飽まで現実であり、後者はどこまでも作品なのである。(30 ～ 31 頁)

ここでは、報道文がもたらす《感動や感激》の源が、日本人(読者)にとっての《大東亜戦争といふ現実》というモチーフ自体によるものであることが強調されている。逆にいえば、これは文学者などの専門家が得意とする《文章の技術的価値や、写真術》によるものではないという言明でもあり、文学者による報道文がジャーナリストや軍人のそれに劣ってみえたとしても、それは専門技術の至らなさゆえではなく、モチーフの問題だというイクスキューズになっている。

こうした言表が紡がれていく理由(の 1 つ)は、太平洋戦争開戦前後の報道文については、文学者よりも、ジャーナリストによるものの方がよいという評価が支配的だったからに他ならない。無署名「新潮評論」(『新潮』S17.6)では「報道文学について」という小見出しのもと、《曾つて報道文学が盛んに要望されてゐる機会に、たまたま支那事変が始つた》(6 頁)と、5 年前を回顧しながら、日中戦争期における文学者の成果を次のように否定的に総括している。

既成文学者たちの大量従軍といふことは、戦争の現地の状況を直接見聞させることに依つて、文学者の精神とか、心構への上の錬成といふやうな点では、大いに意義があつたかも知れない。が、従軍したことに依つて直ちに素晴らしい報道文学が現はれるとか、見聞した戦争現地を題材にして、すぐれた戦争文学が作られたかと言へば、さういふ事実に於いては、人々の期待は決して満たされたとは言へないだらう。(7 頁)

その上で、《大東亜戦争が始まるに先立つて、今度は更に大量の文学者が、現地に赴くことにな

つた》、《もちろん非戦闘員としではあるが、各種の部署に於いて活動してゐる》と徴用された文学者にふれ、《既に二三ヶ月も前から、各方面からの報道も、新聞に雑誌に、発表されつつあるのは、誰でも見てゐる通り》だと、文学者による戦争 - 戦場をモチーフとした報道文に論及する。

> 世評に依ると文学者の手になつた報道文よりも、ジヤーナリスト(たとへば雑誌記者だとか、新聞記者など)の書いた報道文の方が、はるかにすぐれてゐるといふのである。これは単に文章の上手とか下手とか、観察の正しいとか、正しくないとかの問題ではないと思ふ。もつと本質的な点に――たとへば従来の文学者が身に附けてゐるところの教養とか、技術の問題、もう少し深く考察して文学者の資質と、「報道文学」といふやうな、微妙な問題がひそんでゐるのではないか。(7 ～ 8 頁)

ここでは、報道文をめぐるジャーナリスト／文学者の優／劣は既定事項とされ、その上で両者をわかつ原因が探られている。もとより、こうした評価が絶対的なものではなかったにせよ、太平洋戦争開戦後の報道文において、文学者への評価が相対的に低かったことは否めない。

逆に軍人による報道文として、1 面と 3 面のほぼ全面を費やして大々的に掲げられたマレー軍作戦主任参謀談「豪壮壮絶マレー血戦記」(『朝日新聞』S17.4.8 ／以下「参謀談」と略記／全文は、マレー方面参謀談「マレー決戦全記」〔『現地報告』S17.5〕)がある。同記事のリード文を引いておく。

> 我等は今日こゝに大東亜戦争勃発以来、四度び目の大詔奉戴日を迎へる、香港、フイリツピン、マレー、蘭印、ビルマと戦前の対日包囲陣は皇軍将兵の作戦の前に、もろくも崩れ、戦鋒は今や遠く英国の東亜における最後の牙城、印度の鎖鑰をなすセイロン島、印度本土、濠洲の要衝にのび、大英帝国の崩潰は動かすことの出来ぬ現実の見通しとなりつゝある。今日までの一連の突破作戦のなかにあつて英国が百年鉄の防衛を建設したといはれるマレー一一〇キロの突破作戦と、シンガポール攻略戦はその胸のすくやうな豪快さと緻密さをもつてわけても国民の琴線にふれるものがあるが、この作戦を現地第一線にあつて指揮しこの程帰京したマレー軍の作戦主任〇〇参謀は当時の感激を回想しつつゝ七日次のやうなマレー血戦の談話を行つた、淡々として作戦の経過を語りつゝも、そこに盛らるゝものは、最高指揮官山下奉文中将以下全軍に横溢する大和魂の顕現であり、果敢なる戦闘精神発露の姿である、小部隊をもつて敵の堅塁を突き破り世界のいづれの民族もかつて樹立し得なかつた新らしい戦争が凄絶なる精神力と大和民族の血をもつて綴られたのがこの作戦である、世界はこの作戦を通して戦ふ神国日本軍の真の姿を知るべきであり、このマレー血戦記こそは切々として全国民の胸奥に迫り、けふの大詔奉戴日に当り更に改めて征戦完遂の誓ひを固くせしめるものである(1 面)

こうした参謀談をうけて、文学場ではハガキ・アンケートによってのべ 25 名に及ぶ文化人の《感想》が求められた特集「マレー作戦報告を読んで」(『文藝』S17.5)が組まれた。同誌の無署名「編輯後記」には、米国機による初の本土空襲にふれて、次のような所感がもらされている。

> われわれも今は戦線の真只中に在るといふ実感が強い。かういふ状況のなかで、外なる現実と文学との相互関連の糸を見失ふことなく、しかも文学の直面してゐるさまざまな、一見些末にさへ見える問題を手を抜かずに一つ一つ片づけてゆくことは容易な業ではあるまいと思ふ。文

芸雑誌の今後の任務は愈々重いわけである。(128 頁)

つづいて、特集にふれて「編輯後記」は次のようにつづいていく。

★マレー作戦主任参謀の談話を読んで、カエサルの「ガリア戦記」を読んだ時の感動を繰り返した。この二つの戦記は長短の別こそあれ、作者の眼の据ゑどころと言ひ、そこに現はれる人間と言ひ、またそのスタイルと言ひ、おなじやうに多くの文学の問題を提供しているやうに思ふ。諸家の感想を輯めた所以である。(128 頁／傍点原文)

つまりは、戦局のゆくえがリードしていく《外なる現実と文学との相互関連の糸》を注視していくという『文藝』が特集したのが、軍人が書いたところ参謀談(報道文)であり、しかもそれは《文学の問題》だというのだ。同特集に寄せられた《感想》は、《著名人たちの讃歌》[10] には違いないが、本稿では文学場における報道文という観点から、それぞれの言表における観点(評価ポイント)を分析していく。まず、日本文学報国会小説部会の幹事をつとめた岩倉政治の一文から検討していく。

一、こんな大規模な作戦全体を「私」の体験を通じて見渡しながら記された戦記は、今までになかつた。その表現も、内容の圧倒的豊富さによつて、却つて簡潔且つ巧まざる名文をなしてゐる。実に最近の大文章であつた。／二、ところでこの文章に打たれた私が、次に感じたことは、私らが今、安穏な国内に在つて、「いや、今度の戦記は、素晴らしいね」などと評定してゐることと、このやうな戦記を生み出した第一線の凄烈とも荘厳とも云ひやうのない現実との避けがたいギヤツプであつた。この心理的ギヤツプに対する心苦しさは、日本のやうに恵まれた国土内に在るものには避けがたいものではあるが、私はよく心に留めて味はつて行きたいと思ふ。／三、かういふ見事な戦記やニュースを、次から次と求めて、国民としての自然の心情以上に、何かしらこれを一種のスリリングなたのしみにするやうになつては、戦勝国民にのみ許された恐るべきダラクだからである。(123 ～ 124 頁)〔後述のａ、ｂ、ｃ、ｄ、ｅ、ｆ〕

はやくも「一」で、岩倉は参謀談の内容と文章を顕揚しながら前代未聞の戦記として高く評価する。ここには、参謀談全体への総合的な評価とあわせて、作戦やそれを実践する軍人への敬意、実体験に基づく言表(主体)の説得力、それらと連動した適切な表現、までが絶賛されている。さらに「二」・「三」では、銃後と前線との《ギヤツプ》を自覚し、国民として正しく受けとめるべきだと自戒をこめた警告を発している。「マレー作戦報告を読んで」言説の範型ともみられる岩倉の言表に示された観点(評価ポイント)を、**a** 総合的な評価・印象(戦記、科学／精神)、**b** 作戦・軍人への敬意・感謝、**c** 体験・言表主体の説得力、**d** 芸術性・筆法(文学性)、**e** 国民としての受容(連帯感・感謝)、**f** その他(私的感動、身内の事情、支那兵)の 6 つに定式化して、以下の分析を進めていきたい(以下、引用箇所に示された観点ａ～ｆを〔〕内に示しておく)。

上にあげた観点の多くを備えた言表として、次の 4 つ(の変奏)から確認していこう。

日比野士朗：あんな報告は今次大戦を通じて二度と現れない種類のものかも知れない。それは談話者が作戦主任であると同時に、常に部隊の尖兵であつたといふ智力と勇気の総体であつてこそ、はじめて生れる種類のものだからである。あの報告は作戦といふ科学と、人間精神との

深い問題を提起し、私達を考へ深くさせ、私達に勇気を与へる。かかる大胆率直な談話を発表せしめた軍の措置に感謝する。(120 頁)〔ａ、ｂ、ｃ、ｅ〕

＊

大串兎代夫：一切見栄を飾るところのない武人らしい豪放さ、細密さのこもつた大文字で、始めから終りまで吸ひつけられるやうに読まされた。参謀自ら戦ふ国、弾丸の中に鉄かぶとを思つて自らいぶかる死生超越の心境、牟田口部隊長の表情、思はず涙しつゝも、われら日本人なりとの歓喜を味はつた。山下司令長官の熱誠天地を貫ぬく。(124 頁)〔ａ、ｂ、ｃ、ｅ、ｆ〕

＊

上林暁：「マレー軍作戦主任参謀談」は近来最も感銘深い大文字と思ひました。作戦の大局が一読判然いたすと共に、随所を彩る忠烈な挿話に感動しました。「マレー作戦は終始定石を踏まず、確信をもつて一見無茶苦茶の作戦を樹て先手先手と敵を制した。」といふところに、天才的な、高度な作戦を感じ、それを大胆率直に公言せられてゐるところに軍の自信を感じ、国民として力強き限りです。凄絶なブキテマの激戦も手に取るやうで、降伏の飛電に接した折の我が将兵の感激も言外に溢れてゐました。(125 頁)〔ａ、ｂ、ｃ、ｄ、ｅ〕

＊

津村秀夫：マレー軍作戦主任参謀談は一度読んだ位では勿体ないものである。〔略〕私の最も感銘したことは、戦争といふものも、作戦といふものの実相も、漸くこれによつて私にはわかりかけて来たといふことである。この長文となつた「談」に比すれば在来の出版物の「戦記」類などまことに微々たるものではあるまいか。国民はこれによつて恐らく初めて作戦の実相を悟り得たのではないか。軍が、この発表を敢てしたといふことは、国民を啓発し、志気を振はせる上に於て偉大な功績があつたといふべきである。(126 頁)〔ａ、ｂ、ｃ、ｅ〕

いずれも、参謀談(報道文)を戦記としてきわめて高く評価をするばかりでなく、戦争 - 戦場・作戦といったモチーフ(内容)を最大限顕揚しながら、それが現地で作戦に関わった軍人＝体験者による言表としての説得力を伴って国民へと伝わり、大きな感動をもたらしていく、という構図を、それぞれのアクセントによって(変奏を伴いつつ)反復していく言表となっている。

以下、個別のポイントについても確認していく。**a** 総合的な評価・印象を軸としながら、**b** 作戦・軍人への敬意・感謝および **c** 体験・言表主体の説得力、が関わっていく言表から検討していこう。その典型とみられるのは、本多顯彰による次の言表である。

作戦の中枢たる参謀主任によつて語られ、あの大作戦が展望されるところに、他の戦線報告に見られぬ大きな興味がありました。私は一気にあれを読了し、将兵の絶大の労苦に感謝しつつも、ある将軍が私に洩らした「味方の兵隊さへ死ななければ戦争くらゐ面白いものはない」といふ言葉が、全くほんたうだと思ひました。(121 頁)〔ａ、ｂ、ｃ〕

こと、《何の粉飾もなく平明に語られている》とその表現に注目した土方定一は、《未曾有の作戦の全貌が語られてゐるだけに、その時々に置かれた状況も一層明白となり、それらの状況がどのやうに征服されて行つたかを知つて感動の新なものがありました》(124 頁)〔ａ、ｂ、ｃ〕と、参謀談を介して銃後の国民が作戦(の進行)を実感できたことに《感動》を覚えている。ここに、談話の意味作用＝**e** 国民としての受容を加味すれば、次の河盛好蔵評となるだろう。

不謹慎のお咎めを受けるかもしれませんが、「マレー作戦報告」を読んだとき、正義の戦ひといふものは実に面白いものだ、素晴しいものだといふのが正直な最初の感想でありました。しかも稀有なことには、この報告は血河屍山の凄惨な激戦の物語であるに拘らず、そこには戦争につきまとふ陰鬱な影は全くありません。その理由は何かと考へたとき、始めて大東亜戦争の真髄にふれ、皇軍の世界に比類のない卓絶さを身にしみて感得しえました。と同時に、身は銃後にありと雖もこの大戦争を勝つて勝ちぬかうといふ勇気が凛々として総身に湧き上るのを覚へた次第であります。(123 頁)〔ａ、ｂ、ｅ〕

あるいは、キーワードとして《科学》と《精神》を掲げた、次の張と岩上の言表もみておこう。

張赫宙：「マレー作戦報告」を読んで、「科学」と「精神」の完全な一体が、この輝く勝利となつて現はれたのだといふ自信を得ました。〔略〕あの「作戦報告」の随所に現はれてゐるやうに、異常な精神力といふものが、科学的な数字ではとても計り得ないものであるといふことを痛感しました。(122 頁)〔ａ、ｂ〕

＊

岩上順一：それ〔日本軍の戦術〕は合理性をどこまでも求める精神と、その合理的結論を超える烈々たる意欲、忠誠、勇気、決断、等の実践的精神との完全なる調和統一の上に立つていた。こゝに日本軍の優越が見られるといふことを、全く明白に感じることができました。(124 ～ 125 頁)〔ｂ、ｃ、ｅ〕

素朴な実感レベルにおける感動から、西洋(英米)を対置した理念的な勝利の意味づけまで、参謀談は一つの方向性において幅広く受容され、いずれもがナショナリズムの高揚へと繋げられていく。その一つの極とも思われるのが、立野信之が言表した次のような受容 - 共感の連鎖である。

あの朝、私はいつものやうに寝床の中で新聞をひろげ、参謀談を読み出したのであるが、途中で涙を催し、これはいかぬと思ひ、坐り直して読んだ。読みながら二度大笑ひをし、三度涙を落とした。それから老母の家に出かけて、居合せた親戚の青年教師と老母に読んだかときいた。青年は読んだといふ。泣いたかといつたら、泣いたと答へた。私達の話を、老母は傍らで目をかがやかして聴いてゐたが、やがて、わたしも読みたいが読むと興奮して病気にさわりさうだから、その新聞を取つておいてくれ、永久にしまつておく、といつた。(124 頁)〔ａ、ｂ、ｆ〕

しかもこうした評価は、西欧近代(英米)の覇権を粉砕するという崇高なモチーフゆえというばかりでなく、参謀談の芸術性にもよる。それをはっきりと言表したのは、次に引く板垣直子である。

四月八日に発表された「マレー作戦報告」はいろ / ＼な意味から大きな感動をもつて一気に読み終え、読後も深い感動をもちました。が、それを現地報告といふ「文学」として考へる時に、やつぱり実際に戦つた人でなければかけない報告であることを感じました。大東亜戦争でも、最も優秀な現地報告の文学は、作家などからではなく、実戦に参加した将兵の間から生れるのではないでせうか。(121 頁)〔ａ、ｂ、ｃ、ｄ〕

ここでは、言表主体が《実際に戦つた人》〔ｃ〕だという条件が《「文学」》〔ｄ〕の与件として捉えられた上で、参謀談が激賞されている。他にも、丹羽文雄が《あれは誰か小説家が添削したのではないか》、《若しさうでなかつたならば、作家の報道部員は目を転ずべき》(122 頁)〔ａ、ｄ〕だと述べて、文学者に優る芸術性を参謀談に見出した他、映画評論家の今村太平は《これを読んでつくづく思ふことは、今の映画も文学も、この偉大な現実のほんの一端さへ反映してゐないといふこと》だとして、《芸術について大いに反省させられ》(125 頁)〔ａ、ｄ〕ている。あるいは《ふかい感動を以てよみました》と感想を漏らす藤森成吉は、《殊に「督戦などといふケチな気もちではない」云々の牟田口隊長の件など、戯曲に描いてみたい気もちにさへなりました》(123 頁)〔ａ、ｂ、ｄ〕とまで述べている。いずれも、いわゆる文学者による文学作品を相対化しながら、参謀談に高い文学性(芸術性)を読みとった言表といえる。

もちろん、ここでも観点 **c** 体験・言表主体の説得力が重要な意義をもっていたわけだが、そのことを前景化した言表もみられる。次に引く、歴史学者の秋山謙蔵よる感想がその典型である。

> 私は、ラジオで、あの報告を聞いた。一言一言に躍動する清新溌剌たる語調、而も、それは、すべて我々の現実を現実たらしめてゐることに結ばれているものである。今まで読んだ戦争文学、いな、すべての文学作品をも超えた深遠なる感銘を覚ゆ。個でなく全体に、国家を護る精神と現実の一体として在ること、ここに、従来の文学作品の如きに見ることの出来ぬ「生」の原理を体認したものだ。(120 頁)〔ａ、ｃ、ｄ、ｅ〕

ラジオという媒体の効果もあって、表現を裏うちする体験に《「生」の原理》が感じとられている。そのラジオの比喩で参謀談を捉えたのは田畑修一郎で、《「マレー作戦報告」は読んでゐて、今まで雑音のあるラジオを聞いてゐたのが、突然、肉声に変つたやうな親しさと自然さを覚え》たという田畑は、《物事を最もよく知つてゐる人が沈着に語つたときの良さ、精確、正直を感じました》(122 頁)〔ｃ、ｄ〕と、やはり直接体験を表現(の適切さ)へと結びつけて、参謀談を高く評価している。

もとより、体験の直接性は、**b** 作戦・軍人への敬意・感謝と不可分である。そのことを端的に語ったのは、次に引く大江満雄の一文である。

> 特に感じましたことは、山下将軍が先頭師団と運命を共にして、運送船で上陸したことです。「陸軍は軍艦には絶対にのらん。陸軍の軍司令官が軍艦に乗つて指揮が執れるか」と言はれたことが感銘ふかい。／それから、牟田口兵団長が第一線に出て行くのを参謀長達が思ひ止らせようとした時、「俺の部下に部隊長の俺が督戦に来たなどと思ふ水臭いものは一人もゐない」と言ひ、せめて部下の戦死の前に手を握つて別れたいと思ふからだと言はれた心境に立入ると、日本人の涙といふものは、じつにこのやうなことに触れるとき、生への肯定的な、明るい、光りにみちた、制止できぬものだと思ひました。(123 頁)〔ｂ、ｅ〕

文字通り生死を賭した戦場にあってもなお、危険を顧みない山下将軍、牟田口兵団長の行動は大きな感動を呼び、参謀談中、最も言及の多い固有名となっている。すでに参照した津村秀夫も、この 2 つの固有名には紙幅を割いている。《作戦主任参謀の構想を活かして駆使された、山下最高指揮官の頭脳と人格の偉大さにも同じく敬意を感ぜざるを得ない》、《牟田口部隊長の前線へ出動せんとするを幕僚達が制止し、談話の主人公たる作戦主任参謀自身までも遂に制止し得ざるに至る描

写、その牟田口部隊長の戦死する兵の手を握りたいとの言葉に感動する情景が躍動して、読む者の胸を打つものあり》と記し、《まことの部隊長の人格なればこそあの言葉が発せられたであらうと、合点した》(125 ～ 126 頁)〔ｂ〕と、その行動を賞賛しながら偉大な《人格》を見出してもいる。

こと、牟田口兵団長への言及は多く、徳永直が《特に牟田口兵団長が部下の人々にとめられながらも前線に出て行くところがいちばん深い印象となつて残りました》(120 頁)〔ｂ〕と、佐藤信衛が《牟田口兵団長と参謀との対話の条を読んで私も頻りに落涙した》(121 頁)〔ｂ〕と、そして葉山嘉樹が《平和を獲得する為には、絶対に戦ひに強くなければなりません。強い兵隊のある為には、牟田口兵団長の涙が、その源でありませう》(122 頁)〔ｂ、ｆ〕と述べるなど、参謀談における感動の中心だったことは間違いなく、さらには菊岡久利が《牟田口さんのところでは涙がボロボロ出た》、《山下さんと入場(ママ)式のことなど非常に写実だつた》と 2 つの固有名にふれた上で、《二月十一日や三月十日が、国民的目安になるのもうれしかつた》(121 頁)〔ｂ、ｃ、ｅ〕と国民的受容へと架橋したように、感動自体が e 国民としての受容の一様態でもあった。

それは、参謀談を読んで《三年前、北満の守備軍営にて戦病死した末弟のことを、まざ／＼と思ひ出しました》という辰野隆が《マレーの戦場で戦死させたかつた》(121 頁)〔ｅ〕という国民としての死に方(死に場所)へも変奏されていくし、次に引く尾崎一雄の警告をうみだしてもいく。

> 「若し十一月三日の明治節に開戦となつて戦争状態に入つたならば二月十一日の紀元節までにシンガポールは取れませう。かういふことを申上げて私は出発したのである。(中略)しかし米英に対する宣戦の大詔が渙発せられたのは十二月八日であつたので――」／右の一節によつても、軍では、早くから開戦準備をととのへてゐたことがうかがはれる。和戦いづれにも速応の態勢がとられてゐたのである。「米英とはやるまい」「この上また始めたら始末がつくまい」「不敗の確信があるのか」「つまり話合ひがつくだらう」――国民の一部には、開戦前まで、そんなことを云つてゐた者があつた。さう云ふ連中は、十二月八日の大戦果を見て以来、急に変つてしまつたが、少しは反省し、恥ぢる気持も持つべきだ。(122 頁)〔ａ、ｂ、ｃ、ｄ、ｅ〕

この言表は、参謀談(の開示)が単に戦況を広く伝えるばかりでなく、この作戦を準備・主導して成功させた軍の実績に即して、戦局に多様な態度を示していた国民再 - 統合の契機としても機能し、国民馴致のイデオロギーとしてもきわめて高い効果をもったことを問わず語りに示している。

最後に、参謀談の掉尾に置かれたエピソードへの論及にもふれておきたい。次に引くのは、経済学者の石濱知行による言表である。

> 一番最後にあつた「山西、漢口、ノモンハンの戦闘に参謀として参加した体験から、一番強いのは支那兵、次が蘇連兵、次がイギリス本国兵、オーストラリア兵、印度兵の順であり、東洋民族である支那兵が一番強いといふのは一つの示唆になる」という言葉は、味ふべき言と感じました。(120 頁)〔ｆ〕

あるいは、すでに参照した佐藤信衛も《同じ東洋人たる支那兵がソ連兵よりも英本土兵よりも強いといふ末尾の一節が妙に今でも心に残つてゐる》として、《皇軍兵士の無敵を真に解し得るやうな気がする》(121 頁)〔ｂ、ｃ、ｆ〕と言表している。ポイントは参謀談中の《東洋民族である支那兵》という一節で、ここには日中戦争の長期化についてのイクスキューズを孕みつつも、イギリスを代

表とする西洋に対置して東洋の強さを顕示する姿勢が読みとれる。

こうして、参謀談は「マレー作戦報告を読んで」を介して文学場でも積極的に意味 - 価値づけられ、その意義が拡散されていくことになった。最後に、映画『マレー戦記』(構成：飯田心美、1942)と対照しながら参謀談を論じた言表を検討しておこう。《このあひだ映画「マレー戦記」を観たが、フィルムが展開してジョホールバールに至るまで、正直に言ふと私は不満の心を抑へることができなかつた》と書き起こされる無署名「文芸手帖　マレー戦記と小説」(『文藝』S17.10)では、その理由が《マレー作戦主任参謀の談話が私に刻みつけた明確で生き生きとした統一のあるひとつの世界を、眼前の映画の提供する貧しいレアリティが十分に維持してくれないからにちがひない》と断じられた上で、そこに《なにか文学に対する示唆》(92 頁)が見出されていく。つづいて徴用された文学者の報道文にふれる同文では、《民族の巨大な歩みの前に、文学者たちの表現がどんなに貧弱に、そしてどんなにか無力に見えたことであらう》という認識に即し、次のように論じられる。

> いままでの文学に生得なものの見方や、考へ方、表現の仕方がこの新しい現実を賄ひきれなくなつたといふ事実はどうしても否定することができないであらう。それは個々の文学者のあてのない努力や才能には全く無関係なことである。現実とその理解と表現とのあひだに、なにか一般的な、そして運命的なギャップが生じてきたのだと見るよりほかにはないであらう。(92 ～ 93 頁)

こうして、《いままでの文学》と《新しい現実》との《ギャップ》を指摘する同文は、翻って参謀談から、太平洋戦争開戦以後にも有効な《文学上の意味》として、以下の 3 点をすくいあげていく。1 点めは《これからの文学には現実の全体をひと把みに理解するやうな方法が必要なのではないか》(93 頁)、2 点めは《近代文学は主人公抹殺の歴史だと言はれるが、この喪失した主人公を回復することがこれからの文学の大きな課題となるだらう》(94 頁)、そして 3 点めとして《マレー作戦主任参謀談で特徴的なのは、われわはかうした、かうした、そしてかうした、と一種律動的なテムポで畳みかけてゆく簡潔雄勁な過去形の叙述のスタイル》(95 頁)である。いずれも、文学者による報道文には欠けていながら参謀談には見出された特徴で、それはそのまま今後の文学に求められていく要素でもある。太平洋戦争開戦後の多様な報道文が、こうした現状を照らしだしたのだ。

以上、参謀談の受容 - 意味作用(効果)を分析 - 記述してきたが、昭和 17 年の文学場における報道文は、この参謀談言説と無縁ではあり得ない。具体的には、戦争 - 戦場というモチーフがさらに重みを増し、体験と表現の直接的な結びつきを高く評価するモードへと再編成されていくのだ。

3. 報道文をめぐる言説

2 月 15 日のシンガポール陥落をうけて、月刊誌の 3 月号には一斉に報道文が掲載される。時評文で言及されたものを中心に、管見の限りでマレー戦をモチーフにした報道文を以下に掲げておく。

堺誠一郎「マレー西岸部隊」(『中央公論』S17.3)
成田穣「ジヤングル戦記」(『中央公論』S17.3)
里村欣三「月下の前線にて」(『時局雑誌』S17.3)
中村地平「敗残の敵」(『時局雑誌』S17.3)

松本直治「ゲマスを越えて」(『新若人』S17.3)
里村欣三「馬来軍報道班員の手記　ゲマス＝セガマトの激戦」(『現代』S17.3)
寺崎浩「南国の月」(『文学界』S17.3)

こうした報道文の発表を受けながらも、各紙誌の文芸時評の大半は、いわゆる文学作品への興味が顕著で、また、文芸時評を掲出しないメディアが増えていたこともあり[11]、まとまった反応を調査することは思いの外難しい。そうした中、『文藝』では、無署名「編輯後記」(『文藝』S17.4)に《★大東亜戦争の広大な作戦地域の各地から国内に送られてくる多くの報告を中心に、「呉淞クリーク」の作者日比野士朗氏に文芸時評をして貰つた》(160 頁)と記された通り、一連の報道文をとりあげた日比野士朗「報道と文学　文芸時評」(『文藝』S17.4)が掲載される。まずは冒頭部を引く。

> 三月号の諸雑誌には、軍報道班員として南方戦線で働いてゐる人たちの手記がいつせいに掲載されてゐるので、私はまつ先にそれを読んでみた。そして読後に感じたことは、支那事変がはじまつて応召した帰還兵の手記が、やはりどこかしら光つてゐたといふことである。／もちろん今後も作家たちがつぎつぎと傑れた現地の報道を寄せるにちがひないし、それが楽しみでもあるが、今回は堺・里村・山本の三君のものがくつきりと心に残つた。(80 頁)[12]

書き手の属性にこだわらずに前月号掲載の報道文の紹介をメインにした同文においては、報道文個々への論及は少なかったが、その総体については次のコメントが付されてもいた。

> だいたいかういふ尊い報道に対して、あたり前の文学作品を見るやうな目で批評がましいことを言ふのは、少し筋ちがひだと思ふのである。書斎にあつて文学作品をものし、それを世に問うた場合とは趣を異にするのである。が、報道の内容をいきいきと適確に読者の胸に植ゑつけ、そこに何等かの感動を起すといふのはやはりその報道が持つ芸術の力のせゐであらう。そのためにはやはり鍛へ磨かれた精神とか、鋭い観察力とか、芸術的な表現力とかいふものが問題になるのであつて、この点作家たちが前線に従軍したことは大きな意味を持つと同時に、それ等の作家の才能が十全に発揮されることが望ましい。(83 頁)

ここで日比野は文学作品一般に対して、報道文(の読み方)をその生命を賭した尊い体験およびそれらが読者にもたらす感動に即して差別化した上で、しかしそこに芸術性を見出し - 求めている。そして、その芸術性を文学者の特性と結びつけることで、社会的有用性が担保されようとしていく。

さて、報道文への同時代受容に戻れば、板垣直子は「新日本文学の建設(下)」(『朝日新聞』S17.4.3)で《堺誠一郎氏の「マレー西岸部隊」と成田穣氏の「ジヤングル戦記」(ともに「中央公論」三月号)は優秀な現地報告》だとジャーナリストによる報道文を顕揚して、《作家以外にこの程度の落着いた報告のまづ生れてゐることも、事変にはみられなかつた現象》(4 面)だとして注目している。《今月になつて待望の報道部員の手記が、方々の雑誌に登場した》という「文芸時評①三つの記録」(『都新聞』S17.3.11)の丹羽文雄は、《中でもつとも私を喜ばせたのは作家ではない中央公論編輯者の堺誠一郎君の「マレー西岸部隊」(中央公論)であつた》と、やはりジャーナリストの報道文をとりあげて、《立派な一篇の小説の重量を感じさせた》とまで評して、次のように詳論している。

もはやこれ以上には堺君なる一個の人間が深まることも出来ず、奴鳴ることも出来ず、触手を動かすことのできないぎりぎり一杯の姿を晒け出した。／彼の眼は正確であり、鋭い。突風に似た突撃性をもつて、戦争の中に溶けこんだ。文化人らしい繊細な神経の網を張り、素直に、的確に、冷然と兵隊に肉薄して、通俗に墜ちる余地を残さなかつた。彼の鋭さは親切を失はず、私たちを硝煙の匂ひの消えやらぬ戦場につれ出した。(6 面)

やはり《三月号の諸雑誌で眼新しい記事は、何といつても所謂徴用作家の報道文であらう》と報道文に注目する「前戦へ出た「私」」　文芸時評」(『文学界』S17.4)の河上徹太郎は、《前線の実況報告の類にかけては、我々〔文学者〕は決して新聞杜の特派員以上のものが書けるとは思はない》、《彼等は局部的な実感を綴り乍ら、同時に全体の戦況の概観を伝へることを忘れないといふ専門的技術を備へてゐる》(12 頁)と、ジャーナリストと文学者の峻別に配慮しながら、《私は徴用文士の労苦に対し、感謝と慰労の念を忘れまい》、《肩にかけた白襷の名誉にかけても、諸君の文章をば月々の短篇の類と同列に月評のタネにする気は毛頭ない》と、敬意を表した上で次のようにつづける。

然し一方私は諸家の報道文を読んでも一つ別の文士気質といつたものが、明瞭にそこに反映してゐるのを看取つた。〔略〕私はそれ等の文章を読み乍ら、そこに書いてある事柄を心に思ひ浮べようとするよりも、それを書いてゐる当人の顔の表情を眼に浮べようとする衝動を禁じ得ないものがあるのだつた。〔略〕では何故そんなものが眼に浮ぶかといへば、彼等が描写してゐるものが、実は外界の現実よりもそれに映し出された自分の表情や心境であるからだ。(13 頁)

こうして文学者による報道文の特徴を指摘する河上は、《さう考へると、報道文として説明的に纏つてゐるのは「中央公論」の堺誠一郎君のものであらうか？》と、板垣、丹羽同様の評価を示す。文学者による報道文と比較しながら浮き彫りにされていく堺の特徴とは、次のようなものである。

堺君の文章の見事さは、体あたりで兵隊にぶつかつていつて書いてゐる点にある。だから文章は、何事もなかつたやうに黙々として平明である。〔略〕そして思ふに、戦ふ者の心理といふものは、さういふ暗黙のうちに、毅然としてゐるものではあるまいか？(15 頁)

してみれば、書き手の表情が想起される徴用された文学者の報道文に比して、体験を率直に平明な表現へと結びつけたジャーナリストの方が、《戦ふ者の心理》が直裁的に示されている、というのが河上の読み方 - 判断であり、それは報道文としての優／劣とも連動している。

翌月以降も、断続的に発表されていく報道文に対して、断片的ではあるがその受容が示されていく。徴用作家の山本和夫はビルマ戦線に赴いていたが、「ビルマ戦線猛進記」(『日本評論』S17.4)と「泰・ビルマ国境突発」(『文藝春秋』S17.4)は、無署名「文藝春秋・日本評論」(『三田文学』S17.5)で《内容はともかくとして表現は少しばかり形容が強すぎる》とされながらも、《これは珍しく作家的咏嘆のすくない忠実なルポルタージュ》だと捉えられ、《上弦の月を仰いで感ずる心にも、かつて火野葦平にみられたやうなおかしな感傷はない》、《むしろ戦争といふものを心理的に深く考へさせるものがある》(108 頁)といった具合に、戦争心理を描いた報道文として高く評価されており、文学的要素があまりみられないことこそが評価された要因となっている。

もっとも、文学的な要素が、全面的に否定されていたわけではない。無署名「新潮・文藝」(『三

田文学』S17.5)は中村地平「森の中の歌」(『新潮』S17.4)をとりあげ、《中村地平の温良がにぢみ出すやうな好文章が、マレイ人の日本に対する深い信頼を、心から感じさせ、安心して納得することが出来る》と同作を評しているが、《これからもどしどし従軍の報告文は掲載されるであらうが、単に報告に終らない深く高い文学の現はれる日の一日も早からん事を祈つてやまない》(162頁)と付しているところから考えれば、報告文の領分にとどまらない文学性が評価されていたとみられる。あるいは、報道文として同時代に高い評価を得ていた堺誠一郎に論及する「最近の文学作品に就て②」(『東京日日新聞』S17.6.4)の岩上順一は、《マレー作戦における報道班員堺誠一郎の従軍記も亦冷静と鋭敏と自己克服とにみちてゐた》とした上で、次のように評していた。

> この人が従軍前に書き残した作品「曠野の記録」を贈られ、私は一気に読了した。その時の深い感動はいまだに身内にのこつてゐる。／この作家は多くの戦争文学作家のごとく直接敵との戦闘を書きはしなかつた。しかし彼はより深いものとの戦ひを止めはしなかつた。それはいはゞ自己自身との戦ひであり、どこまでも誠実に自己の精神の真実を求めんとする血肉の戦ひであつた。そして彼は、これを書く以前に於てすでに自己を超え、またこれを書くことに於て更に高く自己を超えたのである。私は「曠野の記録」に於て戦争文学が一つのより高い世界に踏みこんできたことを感ぜずにはゐられなかつた。(4面)

ここで岩上は、堺の報道文に関して戦闘シーンよりも自己の超克に注目しているが、こうした受容は、参謀談などでも一部みられたが、文学性としての評価も重ねられたものとみてよい。

従って、戦争 - 戦場をモチーフとした報道文において、文学者の旗色は相対的に悪かったとはいえ、文学性・文学者もまた一部では求められるなど、混沌とした状態にあったとみられる。そのことは、昭和17年の6月をピークとして陸続と刊行された、マレー戦に関する単行本のラインナップからもうかがえる。ジャーナリストによる成田穣『マレー戦記』(那珂書店、1942.6)、酒井寅吉『マレー戦記』(朝日新聞社、1942.8〔川崎豊次郎『マレー従軍記』併録〕)、陸軍による『軍報道班員の手記　パレンバン・落下傘部隊　マレー戦記』(新東亜協会、1942.6)、『大東亜戦史　マレー作戦』(朝日新聞社、1942.7)などに加えて、やはり陸軍が関わったものでありながらも、栗原信『六人の報道小隊』(陸軍美術協会出版部、1942.12)や『大東亜戦争　陸軍報道班員手記(マレー電撃戦)』(大日本雄弁会講談社、1942.6)など、文学者が関わった書籍もみられるのだ。

ここで『大東亜戦争　陸軍報道班員手記(マレー電撃戦)』に注目してみれば、本文に先立ち、大本営陸軍報道部長・陸軍大佐の谷萩那華雄による、次の「序」が付されている。

> 大東亜戦争は米英の東亜侵略を覆滅して、八紘為宇の大理想の下に東亜民族を解放せんとする大東亜の建設戦である。すなはち陸軍報道班員は、この建設戦の重要な一翼を負担して最前線に立つ勇士である。或は文化挺身隊ともいへよう。開戦後日なほ浅きにも拘らず、戦線いたるところの諸民族がわが征戦の意義を真に理解して皇軍に協力し、新生アジアの建設に努力しつつあることは、もとより大御稜威の下、皇軍将兵の勇戦奮闘と軍紀至厳の致すところであることはいふまでもないが、一方わが報道班員の挺身的貢献を見逃すことは出来ない。(3～4頁)

陸軍報道班員となった文学者もまた、この《建設戦》において、一定の役割を課され、期待され、果たしていたのだ。目次には、堺誠一郎「マレー西岸部隊」、松本直治「タイピンからカンパルま

で」、里村欣三「架橋部隊」、柳重徳「イポーからクアラ・ルムプールへ」、里村欣三「魂の進撃」、S報道班員「スリム殲滅戦」、里村欣三「ゲマス＝セガマトの激闘」、田中英「セレンバンの母」、寺崎浩「彼南から（第一信・第二信）」、松本直治「ラビス戦線にて」、堺誠一郎「肉弾の突進」、N報道班員「コタバル上陸戦」、里村欣三「月下の前線にて」、里村欣三「醜の御楯」、柳重徳「ブキテマの丘で」、松本直治「歴史の変る一瞬」、里村欣三「歴史的会見を観たり」、中村地平「敗残の敵」、栗原信「戦線点描」、井伏鱒二「アブバカとの話」、中村地平「サニー」、北町一郎「戦線微笑記」、井伏鱒二「マレー人の姿」、中村地平「森の中の歌」、平櫛少佐「マレー攻略戦を顧みて」、「マレー方面帝国陸軍作戦日誌」、といった文章が並ぶ。

同書については、海野十三が「今次聖戦の報道文学を読む」（前掲）で次のように評している。

> 記者ばかりではなく、作家も多数交つて筆を連ねてゐる。これまた絢爛たる報道文の花籠のやうなものであるが、中でも私の目を惹いたものは、堺誠一郎氏のもので、戦闘はないが、常に熱心にスマートに書かれてあり、光明に輝いてゐる。日記風のものなど、特に感心した。中村地平氏のものは軽快なる作で、人を楽しませる力をもつてゐる。かうしたものは沢山欲しいと思ふ。北町一郎氏のものや井伏鱒二氏の作もまた軽妙であるが、里村欣三氏の作品に至つては、実に力が入つてゐて、熱心なる作である。（61 頁）

この言表を読む限り、個別の報道文についての論評の評価軸は 1 つではなく、ある程度の多様性をもっているように映じるが、《熱心》と《軽（軽快・軽妙）》とがキーワードとなっていることは間違いない。おそらく、前者は体験と表現の緊密な結びつき、後者はモチーフに対する一定の距離を、海野は報道文評価の幅として示したものとみられる。さらに、同文で海野は、成田穣『マレー戦記』にも論及し、そこでは《著者はもちろん陸軍の報道班員で、記者》であることを確認した上で、《これを読んで、非常にうたれたところは、やつぱり同氏が身を以て体験した戦闘の記録である》（60 頁）と、前者の評価軸によって同書を高く評価している。

してみれば、文学者にして『中央公論』特派員という二重の属性をもつ堺誠一郎こそが、（文学者にして報道班員、という徴用作家の先駆的な型という意味で）この時期の報道文をめぐるキーマンといえる。戦争 - 戦場というモチーフに対して、現地で体験を生きる言表主体が、いかなる報道文を書くのか。それに対する評価軸としては、表現それ自体はもとより、書き手の属性が、体験（の切実さ）を関数として重要な観点となったのだ――正確で無駄のない報道を旨とする軍人、ジャーナリストに対して、体験を自己の真実として血肉化した上で表現しようとする文学者、それぞれの書いた報道文が、それぞれの特色をもつ表現として発表され、大勢としてはモチーフとの適応関係から軍人、ジャーナリストによるものが高く評価され、効果的でもあったようである。

4. 報道文をめぐる文学場

昭和 17 年、徴用された文学者の報道文が一斉に発表される以前、「麦と兵隊」以来、戦争文学の旗手として活躍しつづける火野葦平は「報道と文学」（『知性』S17.2）で次のように述べていた。

> 報道と文学といつたやうなことについて、意見を述べよといふことであるが、この自ら異つた性質のものをどういふ風に結びつければよいものか、些か迷はざるを得ない。報告文学とい

ふ言葉があるので、さういふ点でひとつの問題が提起されるのかも知れない。ある報道が文学であることはあり得るが、それは文学本来の意義とはまた別個のものになるであらう。(16 頁)

この後、文学場で展開されていく報道文をめぐる議論を予示するようなこの一文で火野は、報道と文学とを峻別していた。ここには、ジャーナリストによる報道文と文学者によるそれとの、根本的な性質の違いも含意されている。

この時期に、報道文をめぐる文学者の特質・立場をよりていねいに論じていたのは、保田與重郎である。《戦争と共に徴用された文学者の報道文は、断片的には以前にも新聞紙上に出たが、最近になつて、各月刊雑誌に多数現れた。その以前の頃から、これを新聞の特派員の報道文と比較する風があつたがかういふ比較は大体無理である》と断じる保田は「国家への使命　文学者の報道文について(一)」(『朝日新聞』S17.4.17)において、《報道文の一使命は正確に事がらを伝へるといふ点にあるのだらうが、もと/＼新聞として発達した現代の文章と、近代文学として発達した文芸との間には真実の伝へ方も異るし、正確さの文章的造型といふことについての思想も、文学観として大分に違ふものであつた》と、その根源的な種差を腑分けした後、次のように論じていく。

新聞の記事の常識をもととして、文士の報道文が未しいといふやうな意見は、さういふことを期待した方が早計だつたのである。文学者の技術は、さういふ機能と関係なかつたからである。／今のところでは、徴用された文士たちが、実に勇躍して出征していつたといふことが、非常によいことであつて、さういふよいことの成果が、円熟してあらはれるのは、なほ当分の間は不可能であらう。今日のところでは、自分らのもつ公認された技能をもつて、一途に国家の使命に奉じようと考へつゝ、実際的なことになると、旧来の文学世界を新戦場にさがしてゐるといふ状態である。(4 面)

ここでは、文学者による報道文の急所が正確に指摘されている。端的にいえば、戦争 - 戦場という新たなモチーフに対して、《旧来の文学世界》が適応できていない、ということに尽きる。つづく「新しい契点へ　文学者の報道文について(二)」(『朝日新聞』S17.4.18)で保田は、《近年来云はれてゐる報道文学が旧文学とこの後の新文学の過渡的なものとなるかどうかといふことは、なほ文学史上の上での予想に止ることだが、おそらくさういふ文学史的過渡期の作品の典型が、「麦と兵隊」》だと具体的な作品をあげつつ、次のように処方箋を示していく。

結局、文学者の描く報道文は多少とも、その人のもつ文学で描いてゐるのであつて、文章技術などといふものは多分なかつたと思はれる。そこで、いつまで古い文学感覚をもちつゞけ、いつから、それをおとしてしまふかが、我々の期待する新しい報道文の成立する根柢となるわけであらう。(4 面)

戦争 - 戦場という新たなモチーフに対応するためには、《古い文学感覚》と訣別すべきだ、というのが保田の提言なのだが、ならばその上で問うべきは、具体的にどうにすれば、文学者による文学性が保持された、文学者による《新しい報道文》が成立するのか、ということだ。

このことと関わる論点として、ジャーナリストの速報性に対して、文学者には時間が必要だという議論もみられる。無署名「新潮評論」(『新潮』S17.7)では、「萎縮せる文学」という小見出しのも

と、開戦から半年後の文学場が次のようにレビューされている。

> 大東亜戦争が始つて既にまる半ケ年を過ぎたのであるが、作品の上にもこれといふやうな、質的にすぐれたものが現はれたのを知らない。戦線にも幾多の文学者たちが動員されて、働いてゐるやうだが、まだ今までのところでは、そこから「麦と兵隊」の場合のごとき報道文学としての傑作は、齎らされてはゐないのである。〔略〕今、早急にそれを望むのは余りに性急であつて、今後の一年なり二年なりの歳月に期待すべきが当然だらう。(8 頁)

その上で、同文では《それにしても、馬来半島の攻略記にしても、バタビヤ戦線の記録にしても、参謀幕僚談や、某副官談などの方が、簡潔でもあり、適確でもあるし、感銘がふかいといふ銃後の世評》(8 頁)にふれて、《報道文学、戦争文学の氾濫》により、《読者は、「報道文学など、ちつとも魅力がありません」といふことになるのは、当然》(9 頁)だとみている。そうした中、いかにして文学者がよりよい報道文を書き得るのか、その指針は次のように示されている。

> ここで何より大事なことは、決戦下にふさはしい文学者の新しい世界観の把握であり、その世界観に基づく新たなる文学行動の出発である。時勢の要請に応へて、文学者も象牙の塔に、閉ぢこもつてはゐられない。政治にも交渉を持たねばならないし、国家目的に多少でも悪影響を及ぼすやうなことは、書けないのではなく――自ら書いてはならない。／しかも、それだからと言つて民族のこころに融け込み、国民の精神に燃え上るやうな新しい文学が確立出来ないはずはないと思ふ。(9 頁／傍点原文)

《時勢 - 国家》という要素が明示されているのが違いではあるが、ここでも先の保田の言表同様に、決戦下に適した《新しい世界観》が文学者に求められている。逆にいえば、これまでのやり方では、太平洋戦争開戦以後の文学場においてはモチーフに追いつけないという診断でもある。だから、新たな出来事 - 体験を血肉化し、文学表現へとねりあげていくための時間が必要なのだ。

新たな出来事 - 体験／戦争 - 戦場というモチーフと文学者のギャップに注目した上で活路を見出していこうとするこうした方向性は、実作者からも示されていく。伊藤整は「報道文の性格(文芸時評)」(『文藝』S17.10)で、次のように報道文をめぐる現状からの思索を開示している。

> これまで私たちが読んだ報道記事のなかでは、実戦に携つた軍人の談話の記録したもの、または手記がもつとも真剣で力強いものが多かつた。そのことに、私は現在から後の文学の根本性格を見る。体験と表現との強い結びつきを外にして、これからの文学はあり得ないと思ふ。〔略〕体験とそれを記録する人の精神の合致したところに、ほとんど附帯的に文筆といふ能力が加はつて、読むにたへる作品が出来るのではないだらうか。(43 頁)

その上で、(徴用組も含め)文学者に関わる、新たな出来事 - 体験と文学表現との関係について、伊藤は次のようなポイントを示して、文学性を保持した報道文の可能性を論じていく。

> 文学者が現地に身をおくといふことは、かへつて体験の文学における重要さを大きくするものだ。さういふ意味では文学者は、どこに身をおいても出来るだけ地についた生活をし、文学

者に特有な責任のある物の見方を体得しなければならないであらう。よしんばある場合、現地にゐる文学者の体験記が閑文字のやうに見えようとも、それが内容のある生活の反映である限り、そこに仕事の真実があることを私たちは覚るのである。(44 頁)

ここでの急所は、《文学者に特有な責任のある物の見方》に他ならず、それはおそらく軍人やジャーナリストにはないもので、つまりは文学者固有の文学性の根拠となるものである。しかも、文学者の報道文である以上、いわゆる速報性を伴った事実の正確な報道は、必ずしも求められてはおらず、従って戦局や社会情勢にとって《閑文字》に映じるようなモチーフ(の局面)を書いたとしても、文学ゆえの《真実》を表現することは可能である、というのが伊藤の立場・文学観である。

その具体例として、伊藤が論及するのは井伏鱒二「昭南日記」(『文学界』S17.9)と小田嶽夫「チャウメにて」(『新潮』S17.9)である。ビルマからの報道文である後者について、伊藤は《小田氏自身の顔は、文章の終りに僅かに現はれてゐる外、大半は報道的な行儀の正しい文章》で、《これまで私たちが、従軍した作家たちの文章を読んで何より不満に思つたのは、この行儀のきまつた文章が多すぎることにあつた》(44 頁)として、それが《この戦争になつてからの、もつともすぐれた報道文は、実戦に当つた人々の談話や手記のみだ、と私には思はれることと連絡する》(45 頁)のだという。それに対して、前者を《大変内容のある文章》だと称揚しては、次のように論じていく。

ここに極めて平然と、作家井伏鱒二が、井伏鱒二式に現地の感情を割り切り、現地の環境を井伏鱒二式に整理して提出してゐる。この日記はかなり長いものであるが、その全部にわたつて、文章のみでなく書いてゐるその人の生活自体が、少しも井伏鱒二を失つたり崩したりしてゐない。そのことに私は驚いた。この作家特有の、軟かな、しかも確かで、ある気取りを含んだ生活と文章とが、昭南島の、現地人を相手にして、少しもひるむ所なく展開されてゐるのは、一種の壮観である。(44 頁)

報道文として成立していながら、「昭南日記」には文学者の《顔》がみえるというのだ。こうした二作の比較をへて、伊藤が示す文学者による報道文のポイントは、次のようなものである。

他人の生活と他人の信念を作家が現地に行つて借り着のやうに身につけても何にもならない。現地でも都会や第二線に作家がゐれば、そこに作家自身の生活があるのだ。その生活が、作家の気持で確信をもつて整理され、判断されてゐなければ何にもならない。そして、それが多分、容易に出来ることではないらしいのである。井伏氏がこの日記を書くまでに半年かかつたといふことは、必要なだけの暇をかけたといふことなのではないだらうか。(45 頁)

総じて、マレー・シンガポール攻略作戦をめぐる報道文／言説によって、文学者は一時的・相対的に劣位に配置されたものの、それでも文学(者)固有の要素までが必要とされなくなったわけではない。参謀談のような、戦争 - 戦場という新たなモチーフに適した報道文にアドバンテージを奪われながらも、軍人ともジャーナリストとも異なる文学性(芸術性)をもった文学者による報道文(文学テクスト)もまた、一定の時間・距離をおいて期待される程度にまでは、昭和 17 年のうちに言説上でのもりかえしは果たされていた。戦争をその極とする、時局と連動した現実 - 体験の重みが文学場にも大きな力をもっていくこの時期、文学者に求められたのは、旧来の文学観を捨て、戦争 -

戦場をはじめとした新たなモチーフに向きあい、時間をかけてそれを自己の問題として把握し、表出していくという、それ自体はこれまでにも反復されてきた営為であった。ただし、伝統的な私小説さえもが変容を迫られる文学場[13]にあって、現実的な諸条件の中、文学者らしい営為をいかにして保持・展開し、報道文も含めた文学テクストを産出していくのか、後退戦はつづいていく。

※本文・注ともに、同時代に即した資料は元号で、その他は西暦で書誌情報等を示す。なお、本研究は JSPS 科研費 15K02243 の助成を受けたものである。

【注】

1　拙著『昭和一〇年代の文学場を考える　新人・太宰治・戦争文学』(立教大学出版会、2015)参照。
2　小田切進編「十二月八日の記録」・「続・十二月八日の記録」(『文学』1961.12,1962.4)参照。
3　櫻本富雄『大本営発表　シンガポールは陥落せり』(青木書店、1986)参照。なお、太田喜久雄「マレーの文化事情」(『知性』S17.3)には、《今度の大東亜戦争開始の劈頭、あつと云ふ間に皇軍のマレー半島北端敵前上陸、息をもつかぬ猛進撃振り、ニュース映画に、新聞紙上の写真に、一躍当代花形役者となり、嘗ては殆どどちらを向いてゐるか判らなかつたやうな熱帯の此の地方が極めて身近に感ぜられるやうになつて来たのである》(32 頁)とある。
4　荻久保泰幸「十五年戦争と文学――十二月八日という日づけ――」(『国学院雑誌』1968.10)他参照。
5　楠井清文「マラヤにおける日本語教育――軍政下シンガポールの神保光太郎と井伏鱒二」(神谷忠孝・木村一信編『〈外地〉日本語文学論』世界思想社、2007)、300 頁。
6　木村一信・神谷忠孝編『南方徴用作家―戦争と文学―』(世界思想社、1996)他参照。
7　拙論「昭和一二年の報告文学(ルポルタージュ)言説――尾崎士郎『悲風千里』を視座として」(同『昭和一〇年代の文学場を考える』前掲)参照。
8　横堀洋一「解説」(同編『昭南新聞(一九四二～一九四五)日本占領下のシンガポール　重要紙面・縮刷版』五月書房、1993)参照。
9　新聞報道の楽屋裏について、金行勲夫「報道戦について(上・下)」(『三田文学』S17.3,4)参照。
10　注 3 櫻本書に同じ、250 頁。
11　拙論「昭和 10 年代における文芸時評(Ⅰ)――総合雑誌『中央公論』『改造』『文藝春秋』『日本評論』」(『人文学研究所報』2017.3)、同「昭和 10 年代における文芸時評(Ⅱ)――文芸雑誌『新潮』『文藝』『文学界』『若草』『作品』『文学者』」(同前、2017.9)参照。
12　山本和夫は、ビルマ従軍記として「シヤン高原――ラフエンよりメソードへ――」(『文藝春秋』S17.3)を発表している。
13　拙論「昭和一〇年代後半の歴史小説／私小説をめぐる言説」(同『昭和一〇年代の文学場を考える』前掲)参照。